

## 委員の皆様からいただいた御意見について(第33期青少年問題協議会第2回専門委員会)

### (1)「子ども・若者等の意見聴取・反映へ向けた手引き(素案)」への御意見

No.	御意見の内容
1	先行事例である中野区や名古屋市は「子どもの社会参加」や「子どもの意見表明」というタイトルであるのに対し、豊島区は「子ども・若者等の意見聴取・反映に向けた手引き」とあり、職員がしっかりと理解して取り組むという職員の視点となっている。また、 <b>主語</b> についても見えづらいので、表現の再整理が必要であると思う。
2	<b>意見を聴き・反映させる意義</b> については、 <b>独立した形で掲載</b> するとよいのではないか。こども大綱の引用の必要もなくなるのかもしれない。豊島区独自の意義として、独自の項目建てをすることを検討してもよいと思う。
3	意義について、子ども・若者が意見を表明することで自身が変わり、それにより行政が変わり、その子ども・若者が親になった時にはもっと子どもたちが意見を言えるようになり、 <b>社会が変わっていくという循環</b> が生まれるというような表現ができるとよいと思う。
4	意義の次に対象となる子ども・若者の設定があるが、その間に、どのような場面で子ども・若者の意見を聴くことが大事なのかを説明したうえで、その対象となる子ども・若者を設定する <b>流れ</b> にしたほうがよい。
5	P11「 <b>意見を言う事が安全・安心でない等、意見を言う環境に特別な配慮や工夫が必要な子ども・若者</b> 」とあるが、この書き方だと意見を言う事が安全・安心でないことが前提になってしまう。書き方の再考が必要である。
6	P13の表について、ここでだけ「 <b>援助</b> 」という言葉が使われている。
7	<b>意見聴取に係る取組をどのレベルに位置付けるのか</b> については再考が必要である。
8	企画参加者の募集と告知を検討し場をどのように作るのか、意見聴取と対話をどのように進めていけばよいのか、どのようにフィードバックをしていくのか、といった <b>流れ</b> と、 <b>第3章にまとめている内容について全体像を図で表す</b> と、さらに読み手へ伝わりやすくできるのではないかと。
9	<b>事業の評価の視点</b> についても、今回何らかの形で入れられないかと思う。事業を実施した後に年間を通して、あるいは実施の都度、どう評価検証していくのか、例えば子どもに情報提供することができたのか等、いくつか視点があると思う。できれば、そういった自己点検の項目もいれておくと、子どもの意見聴取・反映の視点からの自己評価につながるのではないかと。
10	9については、 <b>チェックリストのような形式</b> でもよいのかもしれない。
11	P14の「 <b>バイアス(偏見)持たないこと</b> 」とあるが、偏見を持たないということより、バイアスがあるということを前提として、自分の持つバイアスに自覚的であるとか、自分のバイアスを押し付けないという表現が適切ではないか。
12	成果に囚われすぎないというところで、 <b>成果のために子どもに意見を聴くことのないよう、配慮が必要であることは位置付けた方がよい</b> と思う。
13	子どもの意見を聴取する方法や手段として、例えば「こういったゲームを活用したところ子どもとの対話が良く進んだ」という <b>事例をいくつか掲載</b> したらいいのではないかと思う。意義が先に記載されており、そのための具体的な手段が掲げられていると、取組を進めやすいのではないかと。
14	13に関連して、さらに <b>将来的には、これを活用した研修</b> などが行われるとよいと思う。

(2) 「特定課題をもつ子ども・若者の意見聴取・反映について」への御意見

No.	御意見の内容
1	特定課題を持つ子ども・若者が支援団体につながるようになるまでの仕組みを作ることが必要であると思う。子ども・若者にとってそれほど負担がなく、自分たちの想いや意見を伝えられる SNS などのツールの活用他、意見を聴かせてくださいとこちらから行く姿勢の取組があるとよい。
2	支援団体に協力いただき、特定課題を持つ子ども・若者の支援を通じて見えてくる現実的な課題をヒアリングする機会を設け、得られた情報を政策反映に活かしていくという段取りを整えていくのも一つの方法だと思う。
3	時間をかけて取り組める財政的な支援の検討も必要になるかと思う。子ども・若者の意見聴取の仕組みが成熟していくということは、人が育っていくということに繋がればよい。支援団体の中で当事者が参加しながら主体的に意見を述べていけるような団体の取組をサポートしていくという視点もあると思う。

(3) 「子ども・若者総合計画(令和 7～11 年度)の点検・評価について」への御意見

No.	御意見の内容
1	職員の視点と子ども・若者の視点をどういう指標や基準で、それぞれの評価に活かしてもらうのかというところを、わかりやすく説明したり、工夫していく必要はあるのかと思う。
2	評価が、なるべく負担にならない形がよい。全てを可視化・数値化する必要はなく、職員自身に「これを向上させたい」という目標を決めてもらい、工夫して事業を行った結果どうだったか、どこに難しさを感じて、それに対してどう取り組んだかを書いてもらって評価するという方法もあると思う。
3	目標管理にアクションステップの視点を導入する等、アクションステップのフェーズごとの評価が望ましいと思う。

(参考) 「子ども・若者総合計画(令和 7～11 年度)の点検・評価について」への御意見(第 1 回専門委員会)

No.	御意見の内容
1	各事業の別に聴いていくのか、事業と対象をどのように絡めて考えていくのか、我々の中でも共通認識を持つことが整理につながるのではないかな。
2	青少年問題協議会全体で考えていく必要があると感じたのは、子ども・若者総合計画のそれぞれの事業を評価検証していくにあたって毎年全ての事業について自己点検評価を書いているが、そこに、子どもの権利委員会の評価検証を併せて評価し、繋げていく仕組みを構築できるとよいと思う。
3	評価とは 2 つの意味合いがあり、一つは「説明責任としての評価」であり、各目標に対して、各現場がどのように取り組んだのか、結果を見て成績をつけるような総括的な評価を可視化できる成果で示せるという意味での評価。もう一つは、この計画の評価として新しく挙がってきたもので、アクションステップも含めた「改善へ向けていく形成的な評価」があるのではないかな。所管課の職員は評価する側であると同時に評価される側ともなる。それが更に評価を積み重ねることで改善の当事者にもなるためのプロセスが必要ではないかな。そして改善のベースにあるのは対話であり、評価の循環の一つのキーになると思う。
4	例えば、各部署の方が、研修という形で他部署の評価のデータを見ながら気づきを共有する、こんないい変化が起きている、と必ずしも改善点だけではなくて、起きている変化についてお互いに価値を感じ合う、認め合うとか言語化するという含めて評価の当事者のプロセスをつくっていけるかということ、すぐにではなくとも近い将来に行うことができるようになればよいと思う。
5	所管評価を 0 としている場合には、担当者が何か困っているかもしれないということがあるので、各所管課の困り感に寄り添うことがあってもよいかなと思う。その際、困りごとをどう共有するのかということも考える必要があるのではないかなと思うが、それにより行政内のコミュニケーションがよくなるのであれば、目的に資するのではないかなと思います。
6	全ての事業をどのように評価検証していくのかということと、所管課が自己点検評価をする中で事業がうまくいかないことがあり、それを改善するためにはどうしたらよいのかと困っていることについて、対話をしながら考えていくということがあってもよいのではないかな。